

## 和製漢語の文化交流

### —「国際」を原義から考える—

東日本国際大学留学生別科准教授 宮岸 雄介

国際化というスローガンが、日本にも広く行き渡って久しい。80年代以降新たに国際学部などという名称の大学の学部が数多く誕生し、大学名にも「国際」を冠する学校が陸続と開校し、「国際」というフレーズが活況を呈してきたことは記憶に新しい。因らずも本学も「東日本国際大学」と「国際」の名を冠し、地域社会の国際化の一役を担う使命を持っている。ここで「国際」という語の意義をもう一度振り返ってみたい。

「国際」は、もともとはDiplomatic intercourseの訳語として使われはじめ、その後internationalの訳語として定着していったいわゆる和製漢語である。つまり、明治期、西洋の外来文化を移入する際、日本の知識人達によって大量に作られた漢語の一つである。「経済」「社会」「物理」「小説」などその例は枚挙に暇がなく、和製漢語ぬきにして大学の講義はできない。日本人が多く発明した和製漢語は、清朝が派遣してきていた中国人留学生達によってその多くが逆輸入され、新中国が誕生する際、中国語の正式な単語として次々使われるようになっていった。

古来日本は中国から多くの文明を頂戴してきた。多くの漢字熟語は、その起源が中国にあるが、我々の祖先も西洋学術の理解を容易にするため和製漢語を創作し、それを中国にプレゼントしてきたという事実は意外と知られていない。中国の多大なる学恩に対して、多少なりとも恩返しをしてきた交流の歴史は、漢字圏の文化交流の有意義な方法を我々に示唆しているようにも思われる。

西周(にし あまね・1829-97)がphilosophyから「哲学」という訳語を作ったことはあまりに有名であるが、実はこの「国際」も西周の創意から始まるようだ。1862年幕府によってオランダのライデン大学に15人の学者が派遣留学させられた。その中にいた西周と津田真道(1829-1903)は、フィッセル教授の門下に入り、政治や法律などの概要を毎週教授の私邸に通い詰め、オランダ語で口述筆記した。帰国後、それを翻訳出版したのが「万国公法」(1868年刊)である。実はこの「万国

公法」の中で西周は Diplomatic intercourse を「各国交際」と訳しているのである。それを略して「国際」というようになったのが「国際」の使い始めだという。「国際」の漢字に「際」があるように、「国際」本来の意味は「諸国家・諸国民の交際」というものであった。

しかし、明治の末頃から「国際」は専ら international の訳語として使われるようになったため、「交際」の意義は含まれなくなった。今では後ろに名詞を伴った形容詞的な使い方をする。すでに「国際交流」という語が示すとおり、「交際」の意味を込めるためには、後ろに「交流」と説明を加えなければならないのである。日本語から「国際」の語を移入した中国でも、「国際」は international の訳語として使われることがほとんどとなっている。

漢字は、発音記号である表音文字によって書かれる西欧語と違い、形と意味（義）と発音（音）が一体となった表意文字である。今日「国際」という語は、international の置き換えとして記号のように使われているが、漢字には文字に意味があるため、そこから意味を膨らませて味わえる楽しみがある。「国際」という語が初めて「各国交際」と訳出された原義に思いを馳せるとき、単なる国同士の関係ではなく、開国したばかりの日本が外国と仲良く交際していきたいという願いも読みとることができる。

今、本学にも中国、ミャンマー、ネパール、韓国、インドネシアなどの百名あまりの留学生がキャンパスに集う。民族もさまざまで、宗教も仏教徒、イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒とバラエティに富む。自分の価値観だけが正しいという思いこみでは、彼らとはよりよく交際できない。本学留学生別科の教室では、お互いにそれぞれの文化習慣を尊重し合い、いい点を学び合いながら、どのようにお互い理解し合えるかという問題を日々模索し続けている。ここで得られた国と国との文化交流の成果を、機会あるごとに地域社会にも発信していきたいと考えている。